

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 木村 護郎クリストフ
論文題目 少数言語の維持・復興における「人為性」
一カトリック地域のソルブ語を中心に—
論文審査委員 糟谷 啓介教授、イ・ヨンスク教授、新井 皓士教授

1. 本論文の構成

本論文は、カトリック地域のソルブ語に関する詳細な現地調査にもとづき、ソルブ語の言語使用とそれを支える言語イデオロギーを緻密に分析するとともに、少数言語の維持・復興における「人為性」概念の再考をうながす重厚な力作である。分量は二巻全体で 555 ページ、400 字詰原稿用紙にして約 2000 枚に及ぶ。上巻は本文に、下巻は注釈と資料にあてられる。本論文の内容は以下の通りである（本文は章以下の節に細かく分けられているが、ここでは省略する）。

第一部 本論文の視座

第 1 章 本論文の目的と手順

第 2 章 理論的検討

第二部 ケルノウ語の復興

第 3 章 ケルノウ語使用の堆積と言語イデオロギー

第三部 事例研究——カトリック地域のソルブ語

第 4 章 調査地域の概要、先行研究および先行研究の方法

第 5 章 カトリック地域のソルブ語の堆積

第 6 章 価値の競合——ソルブ語をめぐる言語イデオロギー

第 7 章 言語活動の現場——ヴォトロウ教区の例

第四部 展望

第8章 新たな理論化に向けて

参考文献

資料

2. 本論文の概要

第一部では、本論文の視座を明確にするための理論的考察がおこなわれる。第1章で著者は、「少数言語」を「他のより強力な言語によってその使用が相対的に制限された状態にある言語」と定義する。「少数言語」をめぐるのは、ふたつの相反する方向をもつ動きが見られる。すなわち、一方では少数言語がより通用範囲の広い言語にとって代わられるかと思えば、他方では少数言語の「衰退」をくい止めようとする言語復興運動が起こっている。ところが、このふたつの動きに対して、しばしば異なる評価があたえられる。大言語の勢力が拡大し少数言語が衰退していくのは「自然」であるが、少数言語を維持・復興しようとする運動は、言語の「自然」な流れに反する「不自然」な行為だという見方がそれである。ここには、言語は人間の意図を離れて「自然」に存在する（べき）であるという言語観が暗黙のうちに前提されている。しかし著者は、こうした見方には人間の言語活動に対する根本的な誤解が含まれているという。こうして、「自然／人為」の二分法に従うのではなく、日常的な言語使用から意図的な言語復興運動まで、さまざまな度合いの意識性をふくむ「人為性」を同一線上に位置づけるような理論的枠組みを提示することが、本論文の最大の目的であることが示される。

第二章では、具体的な分析に先立って、これまでの研究で提示されてきた「言語的衛生(verbal hygiene)」「言語管理(language management)」「言語イデオロギー(language ideology)」という三つの概念が検討される。それぞれの概念についてその長所と短所が客観的に検討されるが、著者は、言語を支える言語使用者の信念・意見・価値判断をとりあげることによって、微視的レベルのコミュニケーション状況と巨視的レベルの歴史的・社会的構造を結びつけることを可能にするような「言語イデオロギー」の研究に注目する。こうした考察を通じて、言語への意識的な働きかけとしての「人為性」は、実際の言語使用とそれに付随する言語イデオロギーの二つの相をもつこと、さらに、ある「言語」の状態はその内部で繰り返されるさまざまな言語形態の堆積としてとらえられることが示される。つまり、特定の「言語」の構築過程を明らかにするには、言語使用の堆積過程と言語イデオロギーの相互作用のありかたを把握することが、最大のポイントとなる。

そこでとりあげられるのが、イギリス南西部のコーンウォール地方で話されるケルト系の言語であるケルノウ語と、ドイツ東部のウジツァ(ラウジッツ)地方で話される西スラブ系の言語であるソルブ語である。このふたつの言語は、少数言語とみなされる点では同じでも、その存在様式は著しく異なっている。ケルノウ語は一度母語話者がいなくなった後に、意図的な言語復興運

動によって「再生」した言語である。それに対してソルブ語は、現在に至るまで共同体の日常言語として用いられつつけている。これだけを見ると、ケルノウ語は完全に「人為性」の上に成り立っているのに対し、ソルブ語は「自然な」言語共同体の使用に基づいているかのようである。しかし著者は、それにもかかわらず、その基底には共通の「人為性」の構造が見出せるのではないかという仮説を立てる。

第二部ではケルノウ語の復興が取り上げられるが、ケルノウ語はあくまでソルブ語のありかたの特異性を際立たせるためにとりあげられた参照項にとどまる。したがって、第三部のソルブ語を論じた部分に比べると、記述と分析は概括的である。ケルノウ語は1800年頃までには話しことばとしての使用は絶え、20世紀初頭には母語話者は存在していなかった。しかし、その後の復興運動の努力によって、ケルノウ語は「統一ケルノウ語」として復活し、文法書、辞書、学習書などが整備されるに至った。1928年から現在まで続けられるケルトの詩人「バルド」の称号を授与する式典「ゴルセス」に見られるように、ケルノウ語運動はケルト文化の復興運動と結びついた。また、ケルノウ語協会を始めとして言語復興団体も数種類生まれ、それぞれがケルノウ語の復興に努力を払っている。けれども、専門家のなかには、復活したケルノウ語は真のケルノウ語ではないとみなす人びともいる。しかし著者は、ケルノウ語を日常で使用する人の数がいかに少ないとしても、そのことだけをもって、現在のケルノウ語は真の言語ではないと判定することはできないという。

著者は、コーンウォールでの現地調査を通じて、ケルノウ語の言語使用のありさまを次のように描いている。ケルノウ語は、地名や家族名などの固有名詞の使用に始まり、家屋や子供への命名、唱歌や典礼などの儀礼的使用、講習会などでの言語学習、教材依存の言語使用、書きことばでの創造的使用、日常会話という順序で言語使用が積み重なっていく。後者になればなるほど、使用の範囲が狭まることは確かであるが、この堆積の全体を見ると、ケルノウ語を一部の好事家の関心事と判定するのは性急であるとされる。

さらに、言語イデオロギーの面から見ると、1980年代に外部からの人口流入が増加したことで、地域のアイデンティティのよりどころが求められるようになり、その結果としてケルノウ語復興運動がかつてのケルト主義的な枠組みを越えた支持基盤を獲得し、地域意識のなかに確固たる位置をしめるようになった。そして、ケルノウ語の象徴的役割が、一部の地域主義政党や団体の枠をこえて広汎に政治的に利用されるようになっていく。今やケルノウ語は、地域の「資源」として積極的に活用されているのである。

この章の結論として、言語使用の堆積と言語イデオロギーがからまりあって「ケルノウ語」を構築していることが強調される。言語使用、特に話し手の数だけを見て言語復興運動を評価するならば、その運動の真の意味はとらえられない。しかし他方で、言語イデオロギーが言語使用の堆積を基盤にして成立することを見逃すならば、これまた言語復興運動の実体をゆがめることになるのである。

第三部は本論文の中心部分であり、カトリック・ソルブ地域の言語維持のありかたが、数度にわたる現地調査にもとづいて詳細に描き出される。

第4章はソルブ地域の形成の歴史的経緯と先行研究がまとめられる。ソルブ人が居住する地域は、旧東ドイツのポーランドとチェコとの国境付近にあり、そのなかでカトリック・ソルブは南西側の地域を占める。19世紀後半からプロテスタント地域ではドイツ語への同化が急速に進み、第二次世界大戦後にはカトリック・ソルブ地域が代表的なソルブ地域となるに至った。ソルブ語が日常言語であるのはカトリック・ソルブ地域のみである。話者数はほぼコンスタントに15000人を維持している。ただし、ソルブ語のみを話す者はおらず、すべてのソルブ語話者はドイツ語との二言語話者である。また同時にその地域は、教会との結びつきが強く保たれていることによっても特徴づけられる。

第5章は、第二部で妥当性が検証された言語使用の堆積という観点からのソルブ語共同体の分析である。第1節で本章の課題と方法が示された後、第2節ではソルブ語話者がソルブ語の一体性をどのようにとらえているかが示される。それによると、ソルブ語とドイツ語の混用があったとしても、ソルブ語話者は、ドイツ語とソルブ語標準語の間の連続体それ自体を「ソルブ語」として意識している。第3節では、ソルブ語共同体における言語習得の過程が復元される。家庭、近隣、幼児保育施設、学校教育、成人教育という段階のそれぞれでソルブ語がどのように教育され習得されているかを著者は詳細に記述していく。とくに学校教育において、ソルブ語を授業言語として用いるA学級とドイツ語でソルブ語を教えるB学級が対比される。著者はこの両方の学級を参観し、両者のカリキュラムや生徒の到達度などを比較した結果、ソルブ語の堆積の中心をなすのが、家庭でソルブ語を覚え、A学級に通った人びとであることが示される。第4節では、家庭・職場・団体などでの日常的で創造的な言語使用が、第5節では、公的場面・公共機関・出版などでの状況的使用が分析される。それによると、ソルブ語話者だけが構成員となっている団体以外は、ドイツ語話者がそこにいる限り、ソルブ語はほとんど使われないことが明らかになる。つまり、私的な場面をこえて、ドイツ語話者が混じることが増える公的な場になればなるほど、ソルブ語が使われなくなるのである。

ところがこの点で大きく異なるのが、第6節で検討される教会における言語使用である。教会のミサはドイツ語とソルブ語を使うものに分けられており、後者の場合、ソルブ語の創造的使用を保証する効果をもっている。四旬節の連続説教はすべてソルブ語でおこなわれ、地域で最も広く読まれるソルブ語の定期刊行物はカトリック雑誌『カトリックの使者』であるなど、教会がソルブ語の創造的使用を促す最大の組織であることが明らかになる。第7節では、教会におけるソルブ語の儀礼的使用の側面が考察される。ここで重要なのは、典礼言語に民衆語を使うことを認めた第二バチカン公会議の決定であり、ソルブ語は1965年に典礼での使用が認可された。ソルブ語が「聖なる」領域への参与を認められたという象徴的意義があるだけでなく、ミサはソルブ語だけが使用される言語領域として最大のものとなったのである。さらに、地域で大規模におこ

なわれる巡礼と騎馬行列においても、教会とソルブ語との結びつきが顕著であることが示される。第8節では、ソルブ語を使用すること自体に意味がある象徴的使用について考察がおこなわれる。

第9節は本章のまとめであり、ソルブ語使用の堆積構造が描かれる。著者はソルブ語使用の段階を、「0生活言語としての継続」「1言語習得・学習」「2私的な日常的使用」「3公的な状況的使用」「4公的な制度的使用」「5象徴的使用」の層の堆積としてとらえている。ケルノウ語の場合は、底辺から頂点へ向けてなだらかなカーブを描く山型の堆積が見られたが、ソルブ語の場合はかなり異なり、教会によって支えられる4の公的な制度的使用の層が突出していることである。つまり、教会のソルブ語使用は、地域の言語使用に支えをもたないながらも、崩れずに存続しているのである。これは教会での言語使用が、周囲の言語使用とくらべてソルブ語を用いる頻度と密度が格段に高いことを示している。次の章では、このような言語使用をささえる教会の言語イデオロギーが検討される。

第6章「価値の競合—ソルブ語をめぐる言語イデオロギー」では、今度は言語イデオロギーという観点から、ソルブ語の社会的位置づけが考察される。第1節では本章の課題と方法が示される。第2節では、ソルブ共同体に広くみられる「順応主義」イデオロギーがとりあげられる。しばしばソルブの「平和主義」として描かれる態度は、けっして必要性や礼儀から出るのではなく、少数派として生き残るための戦略であることが示される。第3節では、社会的・経済的に顕著な特徴がないソルブにとって、言語こそが周囲の集団に対する示差的特徴としての価値を有することが示される。第4節では戦後の民族運動団体の言語イデオロギーが考察される。民族運動は言語の保持を「民族的責務」として位置づけたが、社会生活上の利害関心との結びつきをもち、
「民族」と「言語」との閉じられた循環だけを維持しようとしたため、その言語イデオロギーが現実の言語使用に及ぼす影響は弱かった。第5節では、東ドイツにおける「マルクス・レーニン主義民族政策」とソルブ語との関わりが示される。戦後東ドイツは、社会主義民族政策の成功例としてソルブを引き合いにだしてきたが、その目的はあくまで社会主義国家への忠誠心を育てることであり、言語はそのための手段にすぎなかった。とくに1950年代後半からの農業集団化のなかで、民族語の価値を強調することは「社会主義的平等」を阻害するとみなされ、ソ連にならって、少数派が多数派の言語を学ぶことが社会主義的協働の前提であるという方針が唱えられた。第6節では、ドイツ統一後のソルブ政策においては、分権化と文化的自治が進むとともに、少数者への人権保護の観点が強調されるようになることが示される。

第7節「ソルブ語保持の神学—宗教化された民族語イデオロギー」では、教会がソルブ語の維持のために働きかける言語イデオロギーのさまざまな相が、詳細な現地調査をもとに生き生きと描かれる。戦後、カトリック教会は、東ドイツ政府とも民族団体とも距離をとり、独自の立場を保ち続けた。一方では周囲の世俗化された社会に対するカトリックの信仰を保ち、他方では多数派のドイツ人に対するソルブ人の固有性を保つという二重の課題が結びついて、カトリック・ソルブにおいては宗教性と民族性が密接に結びついた。そしてソルブの民族性を支える要素としてソルブ語が最も重視された。たとえば、雑誌『カトリックの使者』の記事には「宗教的・民族

的」というひとかたまりの形容詞が頻出する。また、ソルブ語による祈祷聖歌集『ヴォサドニク』を同種のドイツ語の聖歌集と比較すると、著しい「民族的」要素が明らかになる。たとえば、そこで「われわれ」と呼ばれるのはカトリック信者一般ではなく、明確にカトリック・ソルブを指している。つまり、祈りの普遍的妥当性を犠牲にして、「ソルブ」の要素が強調されるのである。

こうした考察から、教会の言語イデオロギーが明らかになる。宗教的テーマが民族に、民族的テーマが言語に連続的に移行するという概念の連鎖が、教会の言語イデオロギーの特徴である。しかし、ソルブ語の維持・促進を教会の勢力維持のための手段であるという解釈はあまりに一面的であり、カトリック・ソルブにおける宗教化された言語イデオロギーの固有性をとらえそこなう。つまり、「カトリック」であることと「ソルブ」であることが一体になっている地域において、民族、そしてその中核をなす言語は、それ自体が宗教的な価値を帯びているのである。

第7章では、これまでの考察をふまえて、カトリック・ソルブ地域の最南端に位置する「ヴォトロウ教区」という一つの教区だけを対象にして、精密で集中的な現地調査の結果が分析される。ヴォトロウ教区は4つの村から成り、全体で人口が600人程度の村落地域である。著者はこの地域に約2ヶ月に渡って滞在し、家庭、幼稚園、学校、村のクラブ、教会のミサ、聖歌隊や演劇などの場で、村民が繰り広げる言語生活を微に入り細を穿って描き出している。また、司祭をはじめとする村の人びとへのインタビューをおこなうことによって、ソルブの言語意識を生き生きととらえることに成功している。さらに、さまざまな場面での会話や発話を対象として、いつどこで誰にむけてソルブ語が話されるか、またドイツ語とソルブ語とのコード・スイッチングがどのようにおこなわれるかを観察するなど、マイクロ領域での社会言語学的分析にも著者のすぐれた能力を発揮している。

第三部全体の結論として著者は、カトリック・ソルブにおいて教会は順応主義イデオロギーが及ばない空間として認められているだけでなく、ドイツ語話者をもとりこむ形でソルブ語の使用を拡大しようとする傾向さえ示しているという。この点で教会の言語活動は、フィッシュマンの言う「逆行的言語取替え」の側面をもっている。そして、家庭でソルブ語が維持・継承されているのも、教会のこのような言語使用と言語イデオロギーに支えられている面が大きい。したがって、ソルブ語は所与のものとして存在しているのではなく、さまざまな言語イデオロギーのせめぎあいのなかで、言語使用者に強い基盤をもつ教会がソルブ語使用に肯定的な価値を付与することによって成り立っていることになる。

第4部「展望」では、これまでの考察をふまえて、新たな理論化への方向が論じられる。少数言語における言語活動は、地域レベルでの社会的資源の創出の試みとしてとらえられる。そして、少数言語の使用者が社会的次元で何を創出しようとしているのかを検証するために、言語に対する価値付けをおこなうメタ言語活動を言語活動の不可欠の構成要素とみなす視点が打ち出される。言語使用の面では、持続し反復される言語使用の諸形態を特定することによって、一つの段階が次の段階へと連続的に連なって積み重なる言語使用の堆積過程が示された。こうした言語使

用の堆積と言語イデオロギーの相互作用によってはじめて特定の「～語」が構築されるのであり、この構築過程に注目することによって、「～語」を所与の実体とみなすのではなく、単なるフィクションとしてしりぞけるのでもない、新たな分析の視点が開かれる。さらに、この「言語」の構築過程はけっして少数言語だけに固有のものではない。少数言語においては、言語使用の堆積や言語イデオロギーが社会的に「有徴」とされるために「露出」するにすぎない。少数言語に顕著に見られる「人為性」は、多数言語もふくめて、あらゆる言語を成り立たせる本質的な要素ではないかという指摘によって本論文は結ばれる。

3. 本論文の成果と問題点

本論文は、カトリック・ソルブ地域における詳細な現地調査を通じて得られた知見をもとにして、少数言語のありかたに対する鋭い考察をくりひろげており、きわめて高い学術的価値を有している。その成果をまとめれば次のようになる。

第一に、カトリック・ソルブ地域における実証研究として、本論文は第一級の学術的価値を有している。緻密な現地調査と堅実な資料操作に支えられた実証性は、本論文が大きな説得力を有することの支えとなっている。論点を明確に提示しながら、議論を一步一步明晰に進めていく姿勢は、学術論文として模範的であると評価できる。

第二に、社会言語学／言語社会学の先行研究をよく消化した上で、独自の理論的観点を打ち出していることである。とくに、言語使用の堆積と言語イデオロギーの相互作用という点から、個別言語の構築過程をとらえようとする視点はきわめて斬新であり、少数言語研究のみならず、あらゆる社会言語学的研究への応用可能性を秘めている。

第三に、カトリック・ソルブにおいて教会が言語維持に果たした役割を、実証的な手続きによって明らかにしたことである。ソルブの共同体のなかで宗教と言語が密接に結びつくあり方は、他の地域や事例についても貴重な示唆となるであろう。とりわけ教会の言語使用と言語イデオロギーに焦点をあてて詳しく分析した箇所や、ヴォトロウ教区の村民の言語生活を分析した箇所は、優れた分析となっている。

第四に、論文は冷静で客観的な筆致で進められているが、その底には著者の少数言語への深い理解と共感が一貫して感じられることである。著者は常に研究成果を対象とした人びとに還元するという態度を守っている。これは少数言語の研究者に求められる倫理的姿勢として、きわめて貴重なものである。このことは学術論文への評価からはみ出すものであるかもしれないが、著者の研究態度の誠実さの証しとして指摘しておきたい。

とはいえ本論文にも問題点がないわけではない。

第一に、1945年以後のソルブ地域に限定して議論を進めたため、それ以前の歴史的経緯が見えにくくなっている。とくに19世紀後半に「ソルブ・ナショナリズム」が生まれるのと並行してドイツ語への同化が加速化した過程や、ナチス・ドイツ時代におけるソルブ語維持の問題は、戦後のソルブを理解するためにも欠かせない歴史的前提ではなかろうか。

第二に、カトリック・ソルブとプロテスタント・ソルブとの関係についての問題がある。本論文ではカトリック地域を対象を限定しているために、プロテスタント地域をも含めた「ソルブ」がどのような性格のもとに存在するのかについてほとんど検討されていない。

第三に、カトリック・ソルブ内部におけるソルブ語とドイツ語との相互関係が必ずしも明らかにはされていない。これは本論文がソルブ語維持の問題だけをあつかったためでもあるが、ソルブ語話者はすべてドイツ語も話すバイリンガルであることからすれば、ソルブ語とドイツ語との言語接触・言語干渉の問題は避けて通れないはずである。

とはいえ、一つの論文を成り立たせるためには、視点と対象を限定しなければならない以上、これらの問題点を本論文で合わせてあつかうことは難しかったことは理解できる。以上の問題点が指摘されるからといって、けっして本論文の価値が損なわれるわけではない。むしろこれらの問題は、本論文が十分な完成品であればこそ、将来の研究領域としてはじめて明確に輪郭を描くことができるのである。著者自身もこうした問題点をはっきりと認識しているだけに、今後の研究にますます大きな期待をかけることができる。

4. 結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第4条1項の規定により一橋大学博士(学術)の学位を受けるに値するものと判断する。

最終試験結果の要旨 平成14年3月13日
論文審査担当者 糟谷 啓介 イ・ヨンスク 新井 皓士

平成14年3月6日、学位論文提出者 木村護郎クリストフ氏の論文および関連分野についての試験を行なった。本試験においては、審査員が、提出論文「少数言語の維持・復興における『人為性』——カトリック地域のソルブ語を中心に」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、木村護郎クリストフ氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、木村護郎クリストフ氏が学位を授与されるものに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。